

## 「当たり前」がかなう日を夢見て

宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 1年

谷口 日奈子 (たにぐち ひなこ)

「お姉ちゃんはね、人と違ってゆっくりゆっくり成長していく役目なんだよ。」姉のことについて母に初めて聞いたのは保育園生の時。姉が生まれつき「脳障害」をもっているのを知らなかった時だ。そもそも、姉のことを聞いた理由は、保育園の友達から、

「日奈子ちゃんのお姉ちゃんってちょっと変だよ。」

と言われたからだった。私はその言葉を聞くまで、姉のことを変だと思えることは一度もなかった。姉はそういう人なのだと思っていた。

小学生になると、姉は、私の中で少しずつ変わっていった。私にとって、姉は、家族の中で誰よりも特別な存在になっていた。なぜなら、姉は私に、大切な「夢」を与えてくれたのだ。姉は小さい頃から、救急車に搬送される状況になったり、夜中に救急外来にいたりすることがあった。小さかった私も、何度も一緒に付き添っていったのだが、そこにはいつも、落ち着いた様子で診察し、処置する医師の姿があった。ただ頼もしくかっこいいだけではなく、医師という存在は、患者本人だけでなく家族にとってもかけがえのないものであると感じ、私は、小学三年生の頃に、将来は医師になることを決めたのだった。そして、姉を助けたいと強く思った。

また、こんなこともあった。それまでは気づかなかった周囲の人の目が、成長するにつれて気になるようになり、姉を偏見の目で見ると、姉と出かけるのが恥ずかしいと思った時期もあった。そんな時、私の意識を変えてくれたのが母だった。母は、

「日奈ちゃんはいつもお姉ちゃんと過ごしているから、そばに障がいのある人がいても別に変に思ったりはしないでしょ。だけど、日頃からそういうことに慣れていない人はびっくりしてしまうのよ。だから、日奈ちゃんは堂々としていいんだよ。」

と言ってくれた。その言葉は私の力強い味方になった。

また、友達と遊んでいると、よく、

「昨日ね、お姉ちゃんとけんかしてすごく腹が立ったっちゃわあ。」

などと、兄や姉とのけんかについて文句を言うのを聞くことがある。私にはそのことがとても新鮮でうらやましく思える。姉が健常者だったら、私も、友達のように口をとがらせて文句を言っていたかもしれない。姉がけんかをしかけてきた

ら、どんな言葉を言い返そうか、と想像するだけで楽しい。だけど、そんなことは、他の人にとってはごく当たり前のことであって、とりたてて話すようなことではない。私にとっては、それは願いであり、夢であり、とても大切なことなのだけど。

姉は今、特別支援学校高等部の二年生である。以前、母が姉の授業参観に行った時に、「明日への一步」というタイトルで生徒達の「未来への決意」が掲示されていて、そこに、ひときわ目を引く言葉があったという。

「私たちは将来カッコいい大人になりたい。人をまもれる大人になりたい。やさしい大人になりたい。かぞくをまもれる大人になりたい。人に信頼される大人になりたい。」

母の言葉を聞きながら、私は耳を疑った。だって、この学校の生徒達は、何らかの不自由があって、社会から守ってもらうことが多い人達ではないの。それなのに、将来、人を守れる大人になりたい、家族を守れる大人になりたい、と強く思っているのだ。私の中で、障がいのある人への考え方が変わった瞬間だった。

この時から、特別支援学校に通う人達は、私にとって、将来の夢の実現に向けての最大のライバルとなった。そして、最強の仲間でもあると思う。もしかすると、私の中のこの変化は、母がいつも言っている「ノーマライゼーション」と言えるのかもしれない。だけど、それは、姉と私の間には小さい頃からこれまで、ずっとあった形だ。私は、姉が困っている時は助け、姉は、私が悲しい時つらい時には笑顔で私を元気にしてくれる。そうやって私達は当たり前で過ごしてきた。特別支援学校の高校生はそのことを改めて気づかせてくれた。そして、姉がその中の一人であることが、私にはたまらなく誇らしい。

ある時、母はこんなことを言った。

「お母さんね、お姉ちゃんが歩いたら、嬉し泣きしよう。ママって呼んでくれたら、おしゃべりしたら嬉し泣きしよう。そう思っていたら本当にその日は来たけど、もっと上をもっと上をと期待してしまって、なかなか嬉し泣きできないんだよ。」

母は、姉がまだまだ成長するのを夢見ているのだろう。これじゃあ、嬉し泣きするのはまだまだ先になりそう。だから、私は決めた、母よりも先に、一日でも先に、嬉し泣きしよう、と。姉と妹の何気ない会話ができる時に……。